

末黒野

すぐろの



10月号 (通巻770号)

蟬の聲

小川玉泉

低く飛ぶ雲の迅さや梅雨の明け
人を容れ緑蔭深き大けやき
緑蔭や軽きこの身を預けをり
灼くる橋己が帽子の影踏みつ

デーケアへ妻送り出づ朝ぐもり
手の平の一花の軽し百日紅
みんなの声よく透り妻の留守
熊蟬や眩く乾く白シート
ひと鳴きの後の間をとり油蟬
稿継ぐや夜風にまじる蟬の声
蟬声や雲にやはらぐ夕日影
金色に簾を染むる落暉かな

梅雨

松本三千夫

物見岩遺る城址や雲の峰
雨脚の時をり太き青田かな
竹林に棲む昼の闇梅雨の蝶
合歓の花夜目にも白き雲流れ
鎌倉の大路小路や土用東風
大島や土用太郎の雲脱がず
直幹の大杉仰ぐ大暑かな
音絶ゆる磧や石のひた灼けて
凌霄や髭題目の碑にこぼれ
梅雨明けや風の捲れる旅の本
眉固き日蓮少年像灼けて
梅雨湿り小町通りの古本屋

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

冬瓜汁

小野口正江

膳支度揃ひゆつくり盆提灯
正面を向くる亡夫や昼寢覚
いなびかり夫との境まざとかな
姿よき瓜の馬なり早く来よ
短命の手相なりしが西瓜食ふ
河岸へ行く早出の孫や朝曇
蜘蛛の囿や変へる医師の案内図
送り火や風に光りぬ蜘蛛の糸
無花果の葉ばかり大き無風かな
生き方を変へることなし冬瓜汁

日の盛り

清海信子

異国児も入り緑蔭に縄電車
汲みし水金魚を放つまで硬き
白鷺や水に羽音をふり捨てて
涼しさや黙って傍に居ることも
人止めの竹をくぐりて羽抜鳥
千枚の青田に青き夜が充つる
紫蘇畑夜来の雨に勢ひ見す
午後五時のコンテナ埠頭雷遠し
道を問ふたびに道延ぶ日の盛り
水打ってより新しき風通る



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

水を打つ

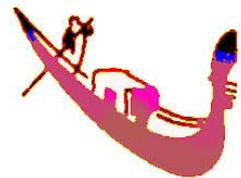
小山ミツ子

杖休め坂に見上ぐる蟬しぐれ
長電話耳汗かいて切れにけり
ひなげしや後いくたびの薄化粧
水を打つといふ快樂ある齡
失業者ばかりの囲む缶ビール
雲の峰 八景島に人湧きて
朝顔や小犬に言葉かけもして

半夏生

鈴木一三

組板の柁目を曝す半夏生
米搗かぬ水車の軋む菖蒲園
釣宿の褪せし魚拓や扇風機
身のほどを悟りし齡冷し酒
今宵咲く月下美人の吐息かな
杖を突く妻に差掛く白日傘
凌霄の万灯めけり空の紺



日盛り 西川みほ

青藍の山湖を滑る若葉風
弓なりに枝引き摘むさくらんぼ
蛭袋 孕み 山湖を渡る風
四方山の裾の青田や水豊か
熊注意の札立つ寺や夏木立
日盛や塩桶に寄る牧の牛
宿包む全き闇や夜の秋

短夜 松田泰子

たむろしてゐても祭の中ひとり
どくだみやまだ生き生きと吊されて
短夜のやはらかすぎる枕かな
萍のひとかたまりの暗さかな
麦秋や少年馬に語りかけ
三代の家族牛飼ふ花南瓜
ほととぎす湖になだるる夜明雲

青嵐 森清信子

子燕やすつくと伸ぶる椰子一樹
殉教の島へ一步や青嵐
夏落葉天主堂への登り口
晴れ渡る沖に壱岐島夏燕
さつばより触れて日向の花あさぎ
池尻の水音たたず花菖蒲
時鳥 棚田 五百の風青し

夏木立 吉田きみえ

夏蝶のもつれや雨のやむ兆し
夏木立映して山の池光る
滝しぶき背に梅雨冷えの石畳
竹林の洩れ日一すじ苔の花
万緑に染み四阿の小暗がり
緑蔭に入るや双子の乳母車
手秤りに思はぬ軽さ濃紫陽花

万 仞 集

満目の紫陽花畦をうづめけり	喪歸りの雀色時合飲の花	南天の花を染めたる夕茜	櫛の目の著き結髪三社祭	睡蓮や鯉の魚紋に水匂ひ	日の盛りこはごは覗く城の井戸	ほととぎす二羽と紛ひぬ谷こだま	たまさかの裏庭掃除苔の花	散らすすべ欲し梔子の花の鏝	直角に拭いて厨の朝涼し
早川八重子	石黒興平	堺昌子	稲垣佳子	橋場美篤	森清堯	上村光八	田村加代	今泉あさ子	小田嶋野笛

過ぎし日のなべて 美し走馬灯	はや夕餉終へて 祭の人となり	仰ぎ見るポプラ 並木や夏帽子	春くや山峡 点す合歡の花	九の段の九九に 挑む子雲の峰	道問はれ吾も 旅人青田風	海上の雲寄せ つけず皐月富士	余部の鉄橋 惜しみあいの風	沢音を裂き鶯の 老いを鳴く	路地奥の算盤 塾や額の花
両角富貴	千葉恵美子	前原マチ	福田禎子	外山節子	嵐 弥生	中山良子	河合とき	占部美弥子	波多野孝枝

